

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02271

研究課題名(和文) 独吟連句の分析による談林俳諧の新研究

研究課題名(英文) New research on Danrin linked verse based on analysis of solo compositions

研究代表者

中嶋 隆 (Nakajima, Takashi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：40155718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、独吟連句の諸本調査を行い未翻刻の俳書を翻刻してデータベースを作成する作業を行った。初期俳諧のデータベースを基に、特に談林を中心とした連句の表現方法や独吟の特性について分析した。談林俳諧を文学史的に位置づけるためには、季節・季語・式目(「句数」「去嫌」等)・付合語・付筋などの連句手法の具体的な解明が必要となる。また新出資料である5点の点取連句の注釈を行ない、談林から蕉風への展開を具体的に考察した。さらに韻文と散文、演劇と小説、評判記という異ジャンルが未分化のまま展開した十七世紀の文芸様式について「ジャンルと様式」という観点から『市野や物語』『傾城百人一首』などを例に考察を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、俳諧語彙の分析に留まらず、散文作品の背景となる言語感覚を解明することも目的の一つである。韻文・散文の境界を取り払った、このような分析方法は17世紀に成立した俳文や評判記、仮名草子、浮世草子等の散文作品の文学史的考察に有益な視点を提供する。俳諧史から見れば、元禄から享保にかけて、蕉風俳諧全盛の中で、なお貞門派俳諧師たちが命脈を保ち続けたのに対して、談林俳風は蕉門に継承された側面があるものの、俳諧流派としての談林派は霧消してしまった。談林俳人たちの、俳諧以外への活動を視野に置くことは、本研究の独吟連句分析を相対化し、文化表象としての文芸を史的に考察する上でも特に意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this project, I surveyed various texts of solo linked verse sequences (dokugin renku), transcribed those without prior transcriptions, and created a database of the above. Using this database and focusing on Danrin works, I analyzed the expressive techniques of linked sequences and the unique traits of solo compositions. In order to clarify the place of the Danrin school in literary history, this work sheds light on technical elements, including seasonal words, restrictions (e.g. kukazu, sarikirai), and other linking techniques. In addition, I annotated 5 newly discovered verse sequences and used these to trace the shift from Danrin to the Basho school. I also conducted a study of 17th-century literary form, which lacked distinctions between poetry and prose and between genres like theater, fiction, and actor reviews. To explore the nature of literary form at this moment, I used the lens of "genre and form" to analyze texts like Ichinoya monogatari and Keisei hyakunin isshu.

研究分野：国文学

キーワード：独吟連句 談林俳諧 ジャンルと様式 市野や物語 傾城百人一首

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでの元禄文学研究は、西鶴の現実認識や芭蕉の人生観など、作者コードから論ずる「作者論」が中心となる傾向があった。これでは、研究対象が、著名作者の代表作に偏ってしまい、文芸という文化現象を、文化の基底と関連付けつつ通時的に把握することにはならない。とくに散文にも影響を与えた俳諧においては、網羅的かつ総合的な研究が不可欠である。本研究では、談林俳諧の独吟連句に焦点をあてた。談林俳諧は、延宝期(1673~81)前後に流行したが、元禄はじめには連歌風な穏やかな俳風が流行し、次第に衰退した。一方、貞享初年(1684)ごろに確立した蕉風は、独特の展開を遂げ、芭蕉没後に俳壇の主流となる。西山宗因の新風創始からわずか20余年、実質的には10年にも満たない一時的な流行のせいも、蕉風俳諧に比べて、談林俳諧にはまだ解明の不十分な点が多い。たとえば談林連句の付合手法には、「心付け」「ぬけ」「見立て」「あしらひ」などが指摘されているが、談林俳諧は難解な句が多く、付合手法も明確に定義しづらい。昭和30年代の今榮藏氏、尾形仇氏らの研究によって、談林俳諧の付合手法は、貞門俳諧の手法と本質的には変わらず、貞門俳諧の延長上に位置するものであることが明らかになった。この見解を前提にして、より具体的にその手法を再検討すべきである。また、談林連句の付筋・発想のキーワードとして、談林の基本理念である「無心所着」が強調されることが多いのだが、この用語が一人歩きし、考証を経ずに便宜的に用いられるきらいがあった。蕉風と異なり、談林では独吟や速吟が流行する。その文化史的解明も十分にはなされていない。

本研究は、独吟連句に注目して、俳文や浮世草子などの散文作品への影響を視野に置きつつ、談林俳諧の表現方法や文芸構造の特徴について分析する。元来複数の作者が前句を鑑賞しつつ付句を詠む「座」の文芸としての連句の特性を排除し、一人の作者が連句を創作する独吟は、蕉門にはあまり見られない創作形態である。独吟連句を含む貞門・談林俳書は、99書(寛永年間10書、正保年間3書、慶安年間6書、承応年間2書、明暦年間3書、寛文年間24書、延宝年間49書、天和年間2書)に及ぶが、そのうち未翻刻の俳書は61書ある。その翻刻作業と分析の基礎データとなる独吟連句のデータベースの作成が必要となる。データベースを基にした分析結果から、談林俳諧独特の手法や、貞門・蕉風連句との類似と相違とが具体的に考察できよう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、談林俳諧を中心とした独吟連句のデータベースを作成して、俳文や散文作品への影響を視野に置きつつ、談林俳諧の表現方法や特徴について分析することにある。そのためには独吟連句の翻刻・テキスト化が必須の作業となるが、さらに俳諧手法の解明、季節・季語・式目(「句数」等)・付合語・付筋などについて、データベースを基に分析する。分析結果とそれを解釈に反映した連句の注釈作業から、談林・貞門・蕉風連句の類似と相違とを具体的に考察する。俳壇的には消滅した談林の俳風は、芭蕉没後の蕉門連句に影響を与えた側面がある。蕉門宗匠の批点の付いた連句の注釈を行い、その点を俳諧手法の観点から明確にしたい。さらに俳諧と散文、小説と演劇、評判記等の諸ジャンルが未分化のまま展開した十七世紀の文芸について、俳諧史、小説史、芸能史といった個別史ではなく、文化基層の反映した諸現象として位置付け、その発生と展開について再検討する。

3. 研究の方法

未翻刻の俳書については、可能な限り諸本を披閲調査することを原則とした。ウェブ上で公開されている図版は、板木を改刻した痕跡が不明な場合が多い。原本を閲覧して、紙質や板木の状態を確認することが版本書誌研究の基本となる。本研究では、その基本に戻って刊(刊行時)・印(印摺時)・修(修訂時)を厳密に調査する。この作業自体が考証研究であり、推論の根拠を明確にしたデータを提供する。刊行書には端本や孤本、さらに改題本がある。俳書には浮世草子等と比べると改題本が少ないが、求板本には改題本がある。書名が同じで同板であっても、板木を買い取った書肆が求板本の一部を改刻する場合もある。改刻は板木の痛みを修訂するためだけでなく、様々な原因が想定できる。本研究では、これらの改題と改刻に到った理由を勘案しながら、諸本調査と翻刻を行う。すでに翻刻がある俳書に関しても、原本や写真と照合し翻字を確認することを原則とした。翻刻作業は大学院生と講師(任期付)が担当し、研究代表者が統括した。極力善本を底本にして、清濁等も底本に忠実に翻刻した。また難字については検討会を開いて読解を確認した。独吟連句のデータベースは、この翻刻作業と同時に、作者・興行時期・季節・季語・式目・付合語・付筋などの分析項目を設定した。

4. 研究成果

翻刻、データベース化した俳書は以下の通りである。百韻(100句)が363巻、歌仙(36句)が49巻、その他(半歌仙・世吉、発句など)が229巻。翻刻した総句数は38293句である。

整理

番号	書名	選者	流派	百韻	歌仙	その他
2	徳元千句	徳元	貞門	10		
8	古俳諧三百韻		貞門	1		
9	長嘯独吟		貞門	6		

13	誹諧集 / 二千句		貞門	10		
14	正章千句	正章(貞室)	貞門	11		
16	伊勢山田俳諧集		貞門	3		
17	寛永古誹諧		貞門	14		
19	望一後千句	望一	貞門	10		22
24	身の楽千句	元隣撰	貞門	8		
26	貞徳誹諧記	一貞撰	貞門	5		
27	みこの舞	友貞	貞門	10		
28	天神の法楽 / 誹諧千句	円立	貞門	10		
29	大坂 / 俳諧雪千句 / 点取			10		
30	歌仙ぞろへ	元隣撰	貞門		8	72
31	誹諧独吟集	寺田重徳編	貞門	21		
35	季吟宗匠誹諧		貞門	1		
36	誹諧句集	季吟自筆	貞門	6		
37	誹諧続独吟集	寺田重徳編	貞門	20		
38	新独吟集	寺田重徳編	貞門	20		
39	時勢粧	維舟(重頼)撰	貞門	31		
41	俳諧塵塚	寺田重徳編	談林	4		
48	西山 / 宗因千句	宗因	談林	10		
49	西山 / 宗因蚊柱百句	宗因	談林	1		
50	思出千句	立志	談林			
51	藤枝集	維舟(重頼)自撰	貞門	2	1	
52	遠山鳥	池田宗旦撰	談林	2		
54	大坂独吟集	村上平楽寺	談林	10		
55	梅翁俳諧集	成美門久蔵筆者	談林	1		
56	俳諧絵合	高政撰	談林	19	1	
57	新続独吟集	寺田重徳編	貞門	21		
58	信徳十百韻	信徳	談林	10		
61	季吟廿会集	季吟撰	貞門	2		
64	釈教誹諧	自悦	談林	1		
66	蛇之助五百韻		談林	5		
67	西鶴 / 俳諧大句数	西鶴	談林	16		
68	後集絵合千百韻	高政撰	談林	4		
71	宗因七百韻	書肆編	談林	1		
73	四人法師	葎宿等	談林	2		3
75	江戸両吟	夏木軒重尚撰		1		
76	珍重集	独長庵石斎撰	談林	3		
79	仙台大矢数	三千風	談林	29	1	
80	惣本寺 / 俳諧中庸姿	高政撰	談林	1	7	
87	桃青門弟 / 独吟二十歌仙		蕉門			21
88	俳諧 / 是天道	高政	談林	1		
90	投盃	梅朝	談林	10		
91	誹枕	高野幽山撰	談林		4	
94	誹諧如何	芳賀一晶	談林			132
96	誹諧 / 東日記	紫藤軒言水	談林		2	
97	一夜庵建立縁起	岡西惟中編	談林		1	
98	武蔵曲	千春撰	蕉門		1	
99	うちぐもり砥	秋風撰	蕉門		2	

まだ断定的な結論とは言いがたいが、データベースを基にした分析結果から、談林派の独吟連句の特徴として、以下の点が指摘できる。

- (1) 貞門に比べ、季のない「雑」の句が増える傾向がある。
- (2) 談林の特徴とされてきた「見立て」「ぬけ」などの技巧的付合は、一卷全体の付合から見ると例が少なく、むしろ「もの付け」「あしらい」のような伝統的技法が多用されている。
- (3) 延宝4～8年の独吟百韻には、遣り句が増え、遣り句の付合技法には「心付け」が多用される。この点は、貞門との相違として注目される。
- (4) 貞門における遣り句は平板な句作に終わることが多いが、談林の遣り句における「心付

け」は、趣向に富んだ付筋となっている場合が多い。

(5) 談林の三句(打越・前句・付句)のわたりは、貞門なら「三句がらみ」とされるようなケースが増える傾向がある

このような談林の独吟連句の特徴が、芭蕉没後の蕉門に与えた影響を考察するために、蕉門俳諧師の宝永・正徳期の点巻に注目した。

イ 『沾徳批点大村蘭台撰「置く扇子」歌仙』

ロ 『其角批点麻雀・河水両吟「世渡りや」歌仙』

ハ 『玄札点賦何笛百韻』

ニ 『友貞批点「おいぼれも」百韻』

ホ 『北枝点「立秋や」歌仙』

以上の5点は、今まで知られていなかった新出資料である。うち4点は本科研費で購入した。大学院生と、語注・付合・句意について注釈を試み、すでに学術誌に発表している。

談林独吟との付合手法を比較すると、これらの点巻には「もの付」「心付け」「あしらひ」が談林同様に多用されている。ただ「心付け」の付筋が穏やかであり、延宝期の談林俳諧のような「笑い」と意表を突くような付合が少ない。これらはデータによる分析というより、注釈作業で得た印象レベルの指摘にすぎないので、連衆の力量や連句創作の場の制約を勘案し、その時代の俳壇・俳風の傾向を総合的に考察しなければならない。俳壇的には消滅した談林だが、その俳風が、芭蕉の門弟たちにどのように継承されたかという問題については、今後考察を深めたい。

さらに俳諧と散文、小説と演劇、評判記等の諸ジャンルが未分化のまま展開した十七世紀の文芸様式について、「ジャンルと様式」という観点から『市野や物語』『傾城百人一首』を例に論究した。同様な観点から、芭蕉の俳文に影響を与えた木下長嘯子の歌文集『拳白集』の叙述にみられる和歌や漢詩、故事などの引用を詳述した注解を、現在学術誌に連載中である。十七世紀文芸と、基底的文化構造との関連については、にわかに結論を得がたいが、談林末期俳壇の考証・再検討や、西鶴に代表される談林俳諧師の俳文・浮世草子の文体分析を通じて、上述の研究を遂行する所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 中嶋隆 荻原大地 木村有紀子 白鳥敬秀 富永真由 長谷川美菜 晝田葵	4. 巻 94
2. 論文標題 水間沾徳点・大村蘭台撰『置く扇子』歌仙注解	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 53-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中嶋隆 稲葉有祐 荻原大地 木村有紀子 白鳥敬秀 富永真由 長谷川美菜 晝田葵	4. 巻 95
2. 論文標題 『世渡りや』歌仙注解	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 31-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中嶋隆	4. 巻 49
2. 論文標題 近世初期文芸のジャンルと様式	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 かがみ	6. 最初と最後の頁 66-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中嶋隆 荻原大地 庄司早希 白鳥敬秀 中野あい 七井亜聡 晝田葵	4. 巻 91
2. 論文標題 新出資料・早稲田大学所蔵 水間せん徳・大村蘭台撰『宇呂利』五十韻注解	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 80-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中嶋隆 荻原大地 小林俊輝 富永真由 晝田葵	4. 巻 96
2. 論文標題 友貞点『老いぼれも』百韻注解	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 237-267
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲葉有祐 宝利彩夏 小林俊輝 戸口桃吾	4. 巻 96
2. 論文標題 北枝点「立秋や」歌仙注解	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 221-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 中嶋隆
2. 発表標題 The erotic fiction Nishimura Ichiroemon; Perspective from Literary history
3. 学会等名 The Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野村 亞住 (Nomura azumi) (30710561)	国文学研究資料館・研究部・特別研究員 (62608)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	稲葉 有祐 (Inaba Yusuke) (90649534)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・講師（任期付） (32689)	